

恋愛と結婚の哲学者としての のキェルケゴール

江口 聡^{*1}

要 旨

キェルケゴールはしばしば「愛の哲学者」として一般読者に紹介されるが、実は彼の（隣人愛としての愛ではなく）恋愛および結婚に対する態度については、国内では以外なほど研究が進んでいない。本論では『あれか／これか』『人生航路の諸段階』および『愛の業』の三つの著作の一部を検討して、彼の著作における恋愛および結婚に対する態度を概観する。

キーワード：キェルケゴール、恋愛の哲学、結婚の哲学

キェルケゴールの著作群

デンマークの哲学者キェルケゴール（1813-1855）の作品は、ペンネーム（偽名）を使った作品群と、実名を使った作品群（多くは『講話（談話）』というタイトルがつけられている）に分けられる。前者は研究者によって「偽名著作」あるいは「美的著作」と呼ばれ²、後者は「実名著作」あるいは内容からして「建德的著作」と呼ばれる³。

美的著作、建德的著作ともに、ごく短い期間に大量に執筆・出版されている。この短い執筆期間、特に1843～1846までの3、4年間に、キェルケゴールの思想に大きな発展があったということは考えにくい。1847年、キェルケゴール34才の年はキェルケゴールが自分の早逝を覚悟していた年であり、この年までにキェルケゴールは自身の著作活動を完結さ

¹ 本稿は、キェルケゴール協会研究大会(2023年7月2日)および日本倫理学会ワークショップ(2024年9月27日)に口頭発表されたものを統合および加筆訂正したものである。

せるつもりだったろうとされている。

美的著作の多くはペンネーム（偽名）による出版であるのに加え、さらにその偽名著者は単なる編集者であり、本文（原稿や手紙）の執筆者はまた別の筆者であるという入れ子の複雑な構造になっている。内容も哲学的・文学的なエッセイ、ある人物を別の人物から見たフィクション（つまり小説）、日記、手紙、アフォリズム集と複雑で多様な文学形式をとっており、ストレートな「哲学書」として読むことはできない。

実名著作の大半は、聖書、特に新約聖書の文言の解釈であり、キリスト教／福音書の規範や命令・勧告の真理性あるいは規範性を前提した上で、新訳聖書の文言を解釈し倫理的な勧告・勧奨をおこなうものである。

愛の哲学者ケルケゴール？

さて、一般には、ケルケゴールは恋愛とセックス（性愛と呼ぶ）や結婚に対して肯定的な態度をとっているはずだ、とされているようだが、実際には彼は「愛の哲学者」と呼ばれるほど恋愛に対して肯定的ではない。むしろ私見では、彼は反恋愛・反セックス、そして条件つきではあるが反結婚論者でさえある。本論はこの論点を説明したい。

ケルケゴールの著作にあらわれる性愛論はおそらく四つのタイプに分けられる。享楽

的性愛論、倫理的恋愛結婚論、性的罪責論、そして恋愛否定論である。

享乐的性愛論は『あれか／これか』の第一部、『人生行路の諸段階』の第一部に見られる、享楽活動（美的活動）としての性愛論、結婚制度の否定、永続的關係としての恋愛関係の否定、『反復』や『恐れとおののき』第3章での恋愛の困難・不可能性を指摘するものである。ゲーテやシュレーゲル、フランスの作家たちの広い意味でのロマン主義文学とその理想の模倣、カリカチュア、屈折した批判になっている。これらの作品の内容は比較的良好に知られており、しばしばケルケゴールの恋愛論や「哲学者／文学者の名言」の一部として頻繁に引用される。

倫理的恋愛論は『あれか／これか』第二部、『人生行路の諸段階』第二部に見られる「倫理的に正しい」生活としての結婚論と、その享楽活動としての性愛に対する優位性を説く。この議論はカントやヘーゲル、あるいは当時のデンマークのヘーゲル主義者倫理学の反映の色が強いとされており、ケルケゴールの著作の内実に即したタイプの論説では言及されることがあるが、その議論の詳細はさほど展開されていない。

性的罪責論は『不安の概念』第1章、『人生行路の諸段階』第3部に見られる、性に関する罪悪感のもとになる罪としての性欲論、そして心理的な負担としての性欲論である。こ

² 「美的著作」は単純には「文学作品」あるいは「哲学的著作」という含みである。主要なものをあげれば、『あれか／これか』（1843）、『恐れとおののき』（1843）、『反復』（1843）、『不安の概念』（1844）、『哲学的断片』（1844）、『人生行路の諸段階』（1845）、『哲学的断片への完結的・非学問的な後書き』（1846）、『死に至る病』（1849）など。

³ さらにその大部分は「建德的著作」と呼ばれる。文学的・哲学的作品ではなく、（キリスト教教会活動などに関連する意味での）お説教である、という含みである。主要なものをあげれば、『二つの建德的講話』（1843）、『三つの建德的講話』（1843）、『四つの建德的講話』（1843）、『二つの建德的講話』（1844）、『三つの建德的講話』（1844）、『四つの建德的講話』（1844）、『仮想的な機会における三つの講話』（1845）、『二つの時代』（1846）、『さまざまな精神による教化的講話』（1847）、『愛の業』（1847）、『キリスト教的講話』（1848）、『キリスト教の修練』（1850）など。同じようなタイトルがたくさんあるので研究者も混乱する。

の議論はケルケゴールの叙述も断片的かつ難読で、研究者によってもまだ十分には解明されていない。キリスト教の伝統における原罪論・性欲論の参照が必要であり、本論では扱うことができない。

恋愛否定論は、『愛の業』に見られるほぼ徹底的な恋愛否定論であり、エロスの恋愛にはほとんど倫理的価値がなく、キリスト教的アガペー／隣人愛の席を譲るべきだとするもので、その後のキリスト教作家たちによって、キリスト教的な「愛」の称賛と理解され参照される。ただし、恋愛関係の否定であることはさして強調されない。

本論では、享乐的性愛論と倫理的恋愛結婚論と恋愛否定論を素描する。前二者は『あれか／これか』(1843) およびその姉妹作『人生航路の諸段階』(1845) で大々的に展開されているケルケゴール思想の基本テーマであるため、彼の恋性愛論・結婚論の基本的立場であるとされている。特に、後半部分の登場人物ヴィルヘルムの説教めいた倫理的恋愛結婚論がケルケゴールの名言として引用される⁴。

以下では、まずケルケゴールの前期著作からそうしたケルケゴールの恋愛観と結婚観を探り出してみたい。

『あれか／これか』の恋愛論・結婚論 審美家Aの原稿群

『あれか／これか』(1843)⁵が、登場人物の享乐的な人物（「審美家」と呼ばれることがあ

る）「A」と、良識的市民のヴィルヘルム判事とのあいだの恋愛と結婚をめぐる対話である、ということは読者には誰にでもわかる（もし長大な作品全体をそれなりに読めたとしたら、の話ではあるが）。ヴィルヘルムが、当時のデンマークキリスト教国教会が推奨していたであろう一夫一婦での安定した結婚をくどくどと称揚していることもほぼ自明だろう。読者にとっての問題は、享楽者・審美家Aが、いったいその大部の文章群で何をおこない、何を主張しているのかだ。私の見方では、Aがおこなっているのは、基本的には恋愛に関する文芸批評・演劇批評を中心にしたアイロニカルなロマンチックな恋愛についての考察であり、そして不幸な恋愛を題材にした彼自身の創作である⁶。人間の恋愛の「現実」ではなく、小説、演劇、オペラなどに表現された恋愛の「^{イデー}理念」が考察されていると言ってよい。しかしそれはどんなイデーだろうか。

『あれか／これか』第一部には、審美家Aのものとする長短八つの評論風および日記風の作品が収められており、第二部はAの年長の友人であるヴィルヘルム判事からAに宛てた三本の長大な書簡が収録されている。第一部はケルケゴールの文章としては『死に至る病』について有名な「誘惑者の日記」を含んでいる。有名なモーツァルト論（「直接的エロスの諸段階、あるいは音楽的エロスのなもの」）ではエロスの愛、あるいは特に男性的な性欲の発展段階の問題が扱われている。この論説は現在読んででもかなりおもしろい考察で

⁴ 大谷(1969)から戸谷(2024)までに至る標準的理解である。

⁵ 『あれか／これか』『人生航路の諸段階』『愛の業』の日本語訳は基本的に創言社のケルケゴール全集のものを使うが、タイトルの表記を含め、江口の判断で訳文を適宜修正を加えている。たとえば(2:109)は全集の第2巻109頁を指す。

⁶ あるいは失敗した文学創作の試みである。たとえば「誘惑者の日記」や「最大不幸者」は、純粋に文学作品として見た場合、一般的な意味では作品の質は高いとは言えないように思う。

あり、「誘惑者の日記」に次いで研究者や文学者によって盛んに論じられている。また「影絵」は他の作家たちの小説で、ふらちな男たちに「誘惑」されて不幸になる娘たちの分析であり、いかにもロマン主義文学的である。

私が注目したいのは、研究者たちに軽視されやすい「輪作」と「初恋」だ。この二本の作品は、全体に憂鬱な印象を与えるAの作品群のなかでアイロニーとユーモア⁷と機知に富んだ比較的気楽で楽しい読み物になっている。そのために他の深刻そうな作品群より研究者の検討が後回しにされやすい。

「輪作」は軽快な諧謔的文章なので研究者からは無視されやすいが、私はこうした軽い文章こそ、享楽者としてのAの面目躍起というところがあると考え。この作品は、退屈という一般的な「実存的」問題、いいかえれば我々の日常的な問題一般を扱いながら、著者の注目は恋愛と性的欲望のうつろいやすさ、それによる結婚生活の困難に向けられており、それをアイロニカルな思索と著作の対象にしている。

人はけっして結婚に関わるな。夫婦はお互いに愛を永遠に誓う。それはなるほどたやすいことだ、けれどもまた意味するところは大きくない。……もし当事者が「永遠に」と言うかわりに、「復活祭まで」、あるいは、「次の五月祭まで」、と言うなら、それには意味があるだろう。というのは、右の両方とも意味のある事を

言っており、おそらく守ることのできることを言っているからである。実際の結婚においてはどうなるか。短期間の経過後、まず一方の者が結婚はまちがっていたと気づく。すると他方の者が苦情を言って、天に向かって声高に叫ぶ、不誠実、不誠実、と。若干の機関の経過後に他の者が同じ点に達する、そしてそこにある中立がもたらされる。……しかしながらそれは後の祭りである。というのは、離婚は大きな困難と結びついているからである。(1:423)

通俗的な文学作品で称賛された情熱的な恋愛が長続きしないこと、結婚生活がロマンチックな恋愛の妨げにさえなりうることはよく知られている⁸。恋愛と人生における退屈、すなわち情熱の減退に対してAが提案する解決策は、新奇な相手の際限ない狩猟か、あるいは反復的な「輪作」である。結婚などといった永続的・固定的な関係は考えずに、相手を順繰りに交換していけばよいのである、あるいは交際と別れを繰り返せばよい、というのだ。

人が結婚に関わらないからとて、その者の生活が性愛なしでいる必要はない。性愛的(エロスの)なものはまた無限性をもたねばならない。しかし、それは一時間に限定されても一ヶ月に限定されてもよい。二人の人間がおたがいに恋に落ちるとき、そして彼らがおたがいに対して

⁷ ケルケゴールの作品群において、彼自身の「アイロニー」や「ユーモア」(フモール)の概念がどういうものであるかということは読者・研究者にとっては大きな問題なのだが、ここでは現在の通常の意味に理解してもらってよい。

⁸ これはどの文化でも知られていることである。世界の各文化における恋愛と結婚の問題については、文化人類学者のヘレン・フィッシャーの古典(フィッシャー 1993)を見よ。

定められた相手だと感じるとき、その時に別れる勇気をもつべきだ。というのは、継続することによっては、すべては失われ、何も得られないからである。(1: 425)

この引用の最後の部分の「持続することによっては……なにも得られない」の一文は「性愛／エロス」に限定された話なのか、あるいはもっと広く恋愛・結婚一般や人生についての話であるのか解釈が難しい。ごく通俗的で日常的な発想からすれば、おそらく、Aの言うエロスの関係、つまり性愛関係を、結婚や長期的な交際関係によって持続しようとするならば、たしかにそのエロス性、つまり性的な情熱や性欲などは次第に衰えてしまうかもしれない。しかし、持続的な関係から我々は、エロス性、性愛の情熱やその満足以外の価値ある多くのものを手に入れることができるだろう。たとえば、単なる性的な愛情だけでなく、友愛や信頼などを含む安定した関係は我々の人生に大きな価値をもつものはずだ。そうした二者関係から子供たちや幸福な家庭生活を手に入れる人々も多いだろう。しかしとにかくこの一節では、少なくともエロスの場合には、つまり情熱的な恋愛や性欲に関係する範囲では持続はそれらを弱めるだけだ、という事実がAによって指摘されている。

このような主張自体は現代の我々にとってはごく陳腐で月並なものだ。だが、キェルケゴールの時代にはそれなりに新鮮だったのかもしれない、また当時のコペンハーゲンの堅実

で保守的な人々にとっては、十分に耳ざわりだったかもしれない（それゆえ我々にはごく陳腐な発想であるとしても、当時はわざわざ作品にする価値があったかもしれない）。

Aの提案に従って、我々が実際に恋愛／エロスの関係の相手を次々に乗り換えていこうとすることは、当時の人々にとっても、また現代の我々にとっても、道徳的に問題があることだとおもわれるかもしれない。キェルケゴールに先だってカントが指摘しているように、単なる性欲によって異性（もちろん我々は特に「異性」にこだわる必要はない）を味わおうとする人々は、いったん味わえば相手を「汁を絞ったレモンのように」捨ててしまおうとする⁹。これは人を単なる性的満足の道具として使用することで、明らかに不道徳である。だが、恋人たちが（暗黙の同意の上で？あるいは信頼の上で？あるいは「互いに定められた相手である」ということを確信して？）、くっついたり離れたりをくりかえしていれば性的興奮の減退も退屈も避けられるかもしれない¹⁰。

もう一本のユーモラスな評論の「初恋」は、スクリーブの原作やハイバーアの脚本が日本語では手に入らないので論評しにくい（これはデンマーク本国や英語圏の研究者にとっても同様の事情のようだ）。キェルケゴールの評論での筋書の描写がそれなりに正しければ、このスクリーブの作品もキェルケゴールの評論も、ロマン主義的な「はじめての恋が唯一の恋になるべきだ」、つまり初恋が成就して結

⁹ このようなカントの性欲に対する態度については、拙論江口(2006)を参照のこと。

¹⁰ このアプローチと別れの反復というこの「反復」というテーマは、同年に出版された『反復』にも反映されている。愛が本当に永遠のものならば、それが何者かによって予定されているのであるならば、何度も同じ相手と愛しあうことができるはずなのだ。しかしもちろん実際にはそんなことは起こらない。

婚がゴールとなるのが最善の恋である、というロマン主義以前の通俗小説的な恋愛観を徹底的に揶揄している。Aが見るところでは、我々は実生活での恋愛は、まったく永遠でないどころか、いろんな人物に性的にも精神的にも惚れこみ飽きてしまうものだが、常に最新の恋愛こそが「本当の」あるいは「初めての」恋愛であって、それまでのものは本当の愛でも真実の愛でもない、として片づけてしまうのである。そしてこれは、そもそも我々がいったい何を理由にして恋に落ちるのがか実はわかっていない、ということの裏返しでもある。この論点は『諸段階』にも引き継がれるのであとでもう少し詳しくみる。

(偽善的な?) ヴィルヘルムの説教

ケルケゴール研究者たちの多くは、大部の書簡によってAに対する倫理的訓告を与えるヴィルヘルム判事を「立派な倫理的市民」として紹介している。研究者たちが指摘することは滅多にないが、私には、『あれか／これか』ではその良識的市民たるヴィルヘルム判事がいかにも偽善的に描かれているのは現代の読者には明らかだろうと思われる(当時の読者にも明らかだったはずだ)。「私自身に関する限り、私は妻に対して何ら秘密を持っていない」(2:154)というようなことを言う連中に、まともな人が混ざっていることすらまれだろう。私にはこれが皮肉な表現か自虐的な冗談としか解釈できない。

時代としてやむをえないところがあるが、ヴィルヘルムの夫婦間・男女間は現在からすれば非常に保守的であり、女性観は現代人の目からすればごく差別的であるといつてよ

い。男女はそもそも本性が異なっており、男女間の対等な交際といったものはヴィルヘルムにとっては考えられないようなものである。19世紀前半に、イギリスのメアリ・ウルストンクラフトやフランスのサンシモン派などによって唱えられた「女性の(男性からの)解放、自立、独立」といった発想はヴィルヘルムの憎むところである。

こうして女性は有限性を明らかにするがゆえに男の最も深い生命であり、しかも根をもつ生命がつねにそうであるように秘められ隠されるべき生命である。見たまえ、だから私は女性の解放というようなすべての厭わしい言論を憎むのだ。そんなことが起こるのを神が禁じたまうように。そんな思想がいかにばかり苦痛を伴って私の魂に食い入るかは君に言い得ぬほどであり、あえてそのようなことを口にする者に対してどれほど激しい憤りや憎悪を抱くかは言えぬほどである。(2:427)

ヴィルヘルムによれば、とにかく結婚生活は、おたがいへのおだやかな愛情や愛着と、おたがいの価値の(男女の本性の)評価、男性の指導と女性の服従、なにより互いへの責任と信頼に満ちたものであり、なおかつ、エロ的なものをもそのうちに含み、十分満足のいくものである。そうした結婚生活を成立させることこそ市民として人間としての幸福でありあるべき姿である。カトリックではあるが、20世紀のヨハネパウロ二世=カロール・ヴォイティワ(1920-2005)もまったく同意することだろう。

さて、ヴィルヘルムのご高説はさておき、

ヴィルヘルムのご自慢の平安無事な家庭生活・愛情生活に対して、Aによって若干の危機がもたらされていることが示唆されていることは無視されやすい。これも研究者によってほとんど無視されている一面である。

私の妻はこうして君に好意をもっている……私の結婚生活にも争いが生じて、君は実際ある意味でそれにも責任がある。無論我々はそんなことはすぐに乗り越えてしまうが、私の希望するのは、君が結婚している夫婦にとってもっと違う争いの因に決してならないようにということだけである…… (2: 446)

つまりAはヴィルヘルム夫妻の生活に侵入し、夫婦の間の不和の原因になっている。そこでヴィルヘルムはAに絶交状を送りつけているわけだ。

では私の挨拶を受けて私の友情を受けとってくれたまえ……私の愛する妻からの挨拶を受けてやってくれ。彼女の考えは私の考えの中に潜んでいるのだから私の挨拶と切りはなすことのできない挨拶として受けてくれたまえ。……君がこんな手紙を受けとることは秘密にする。またそうすることが私と私の家庭に対する君の関係を変えさせるためになんらかの影響をもつようになどとは少しも望んでいないのだ。……こうして私たちの手紙による関係が秘密にとどまるのであるから、私はすべての礼法を守って、あたかも私

たちが互いに遠く隔っているかのように君に別れの挨拶を送ろう。私はこれまでの様にしばしばわが家で君に会えることが希望なのだが。(2: 453-454)

「妻に対して何ら秘密を持っていない」はずなのにAとの間に秘密を作り出しているのは御愛嬌としても、ヴィルヘルムの手紙にある偽善と欺瞞は見逃すべきではない。そしてこの「遠く隔っているかのように送る」別れの挨拶につづいて、「最後通牒」あるいは「最後の言葉」(「ウルティマートゥム」)と題された手紙、通常は国家どうしの戦争の直前に送られる「最終通告」が続くわけである。こうした側面に注目すれば、『あれか／これか』は、多くの研究者が要約するようなヴィルヘルムが若いAに送る人生アドバイスなどではない。むしろ妻帯者ヴィルヘルムが、自分の妻にちょっかいをかけているAに対して宣告する宣戦布告前の通知である¹¹。またヴィルヘルムに関しては『人生航路の諸段階』という、3年後の続編・姉妹作品に注目すべきである。彼がAに報告している愛らしく従順で満ちたりた妻の様子は、常にヴィルヘルムから見た妻の姿、彼の頭のなかで作あげた妻の像と二人の関係でしかないのだ。この作品の気になる部分を見てみよう。

『人生行路の諸段階』での性愛論 『若者』の恋愛論

『あれか／これか』の2年後、1845年に出版

¹¹ あるいは、「神の前では誰も正しくない」という他人の講話を最後通告にしたということは、ヴィルヘルムが自分がそれまでに書いた手紙の偽善性について気づき、なんらかの咎めを感じているということ、そしてそれをAに伝えようとしているということを表すという解釈も可能かもしれない。

された『人生行路の諸段階』は、出版当時から『あれか／これか』の二番煎じであると判断されていたようだ。実際のところ内容は『あれか／これか』の種あかしのところがある（新しいアイデアも大量に含まれている）。『諸段階』に含まれる「クイダムの日記」は、若きケルケゴールが娼家に足を踏み入れた経験を描いているだろうとされる「一つの可能性」を含む「責めありや／なしや」以外は研究者に注目されにくい、「酒中に真あり」やこれまた長大な「読者への手紙」もそれなりに恋愛哲学的に興味深いものを含んでいる。

たとえば「酒中に真あり」では、恋愛を経験したことのないとされている無名の「若者」の恋愛に対する懐疑が述べられている。若者の立場は、『あれか／これか』のAから、詩的・ロマンチックな側面を削った、恋愛に対してアイロニカルな立場だといってよいだろう。Aが「輪作」や「初恋」で採用している立場に近い。あるいは、「輪作」や「初恋」での審美家Aの屈折した詩的な表現を、ごく散文的に登場人物の発言の形にしたものと言える。若者にとって、世の人々が称賛する恋愛というものは、実は「エロスというものが考えられる最大の矛盾であり、そして同時に滑稽なものである」という（4:53）。なぜなら、恋愛を賛美する人々はいったい自分たちがなにを賛美しているのか哲学的な考察が欠けているばかりか、その必要性さえ理解していないからである。

私は、すべての人間が愛しており、愛したがっているのに、愛すべきもの、すなわち恋愛の本来の対象であるものが何であるかをけっして解明することができな

いことを滑稽だと思います。（4:54）

たとえば一般にロマンチックな恋愛では、愛する相手を失ったときには、死を望むほどの苦痛を感じるとされている。しかし、実際に恋愛で死ぬ人間はそんなにいるものではない。

もし詩人〔文学者〕の言葉に真理があるなら……不幸な恋愛は最も耐えがたい苦痛なのです。このことが何らかの証明を必要とするなら、恋する者たちの話に注意していただきたい。彼らは、不幸な恋愛は死、確実な死であると言い、そして一度目はそのことを二週間信じています。二度目も彼らはそれが死であると言い、三度目も彼らはそれが死であると言うのです。（4:50）

どんな対象を愛すべきであるのかということについても実はあやふやである。そもそも、我々がなぜ（イスや犬ではなく）人間を愛するのかという問題でさえあやしい。

人はおそらく、美を愛すべきだと答えるかもしれませんが、もしも私がそこで、愛するということは、美しい風景、すばらしい絵画を愛することなのかどうか尋ねるなら、エロスのものは種として恋愛の範囲に関係するのではなて、まったく独自のものであることがわかるでしょう。（4:55）

エロスのもの、つまり性欲は、プラトンの『饗宴』でソクラテスや他の登場人物が指摘するような美への欲望といったものであるというよりは、むしろ他の人間の身体に対す

る欲望、肉欲なのである。そして単なる肉欲は「愛」という美名で呼ばれるようなものではないはずなのに、一般には「愛」の名と呼ばれているのだ。

さらには、仮に我々が愛している相手愛する理由を提出できたとしても、それはその相手の唯一性を保証しない。なぜ男性は女性を愛する（欲望する）のか？「女性だから」というのはもちろん大きな理由の一つであるはずだ。しかし女性は他にもたくさんいる。

もし恋愛者が自分のララーゲに向かって、「私がおまえが女だからおまえを愛するのだ、私は他のどんな女でも同様に、醜いツォーエだって同様によく愛することができるだろう」と言うとしたら、美しいララーゲは侮辱されたことになるでしょう。(4:56)

「美しいもの」を愛するのなら美しい山や川や美術品でも愛していればよいだろうし、「女性」を愛するのならどんな女性でもよいはずだ。では我々（というよりこの「若者」と共通するものをもつ男性たち）は、単に美しいものすべてを愛するのではなく、「美しい娘（若い女性）」を愛するのだろうか？しかしやはり美しい娘などそこらへんに掃いて捨てるほどいる。なぜ愛する女性、あるいは愛する相手は一人でなければならないのだろうか？

もし人間の女性（あるいは男性）の「容姿」の美しさではなく、『饗宴』でのプラトン（ソクラテス）のように、愛する者は本来的には「魂」の美しさを愛するのだと主張するとしても事情はあまり変わらない。美しい魂をもつ

青年は、美しい容姿をもつ青年（あるいは娘）よりも数が少ないかもしれないが、美しい魂をもつ青年なり娘なりが存在するならば、それは「唯一のもの」ではないことは確かなことだ。正しいエロスの道は、個々の美しい身体へのエロスからすべての身体的美へのエロスへ、そしてさらに魂の美へのエロスへ、さらには永遠に存在する美そのものへのエロスへと高まっていかねばならないと『饗宴』でのソクラテス／プラトンは主張したわけだが、そうしたエロスの道のなかでは「個人」の唯一性などといったものも、愛の排他性も、愛の恒常性も保証されないし、またさして価値のあることではないのである。したがってロマンチックな恋愛の理想は幻想、主観的な勘違いであり、恋愛に右往左往する連中は滑稽である。

こうした美的著作での恋愛論にあらわれるキェルケゴールの疑念は、アラン・ソーブルやラジャ・ハルワニら、現代の恋愛やセックスの哲学者たちが熱心に論じている問題群に対応し先取りしている。それは主に愛の（当事者によって主張されている）排他性、唯一性、そして恒常性と、愛する理由に関するものである¹²。

一般にロマンチックラブの理想（現実ではない）は次のようなものだと考えられている。

- (1) 排他的である、つまり相手以外は目には見えない状態になる、また、相手や自分が、当の相手以外の人間とロマンチックな関係にあることを障害である、あるいは不可能であると考え、そうした人間を排除しようとする。
- (2) 相手は唯一であり、他の人間と交換は不

¹² Soble (2008) ch. 8、ハルワニ (2024) 第2章などを参照

可能である。(3) ロマンチックラブは「永遠」である、つまり恒常的コンスタントである、と想定されている。もちろん現実生活でこれらが成立していることは稀だろう。

ロマンチックラブを、盲目的で、強い情熱とコミットメントと性的欲望（エロス）をともなった関係と解釈する場合には¹³、(1) 排他性、(2) 唯一性、(3) 恒常性のどれもが成立していると感じられるようだが、我々の多くの経験からすれば、そのような情熱的な関係は実際には恒常的ではない。また、情熱的ではあっても排他的ではない恋愛をする人々や、情熱的ではあっても相手の唯一性を強く感じない人物もいるだろう（ドンファンやカザノヴァたちとその低級な模造品たちである。ビゼーの「カルメン」の主人公は、また別のタイプだろう）。

運がよい（あるいは人徳がある？）人々の関係が持続して、二人の恋愛関係がもっとおだやかで安定した友情に近い段階に入ることがある。この場合にも、(2) 唯一性の感覚はまだしも、(1) の排他性の感覚はあやしいものである。

その理由の一つは愛の「理由」に関するものである。「若者」が指摘するように、恋する人々の多くは、なぜ自分がその相手を愛するのかを説明することができない。さらに悪いことに、もし仮に「理由」（金髪や赤い唇など）を示すことができれば、その理由は他の多くの似たような人々にもあてはまることに

なり、相手の唯一性が危険にさらされることになる。

また、我々はある対象を愛するとき、その対象がもつなんらかの性質を理由とすることがあるが、そうした人物のもつ性質のほとんどは時間が経過するにつれて変化してしまうものである。たとえば女性の身体的な美貌は年齢によって衰える（ということになっている。そうした時間的なものを対象に「愛している」などとうかれるのはまさに滑稽なことだ。

他人の恋路は傍から見れば（あるいは無関心（disinterested）な立場で見れば）滑稽な喜劇である。ロマンチックな物語的理想とは程遠いものだが、しかしこれした滑稽なありさまを皮肉に見る態度こそロマン主義の一側面でもあるだろう。

ヴィルヘルム夫婦の実態

では、エロスのな、過剰にロマンチックな理想を捨て、なんらかの運命その他を信じて適当な相手と結婚¹⁴という制度をもちいて互いにコミットし、信頼しあえる安定した関係を営めば我々は正しい恋愛生活を送ることができるのだろうか。『人生行路の諸段階』の第一部「手中に真あり」には、研究者によって見落されやすいが注目すべき箇所がある。ヴィルヘルムの言い分ではなく、外側から見たヴィルヘルム夫妻の姿である。

¹³ ハルワニ（2024）は恋愛のこのフェーズをRL1（Romantic Love 1）と命名して、激しい感情が落ちつき、友愛に近くなった時期のRL2と区別している。日本語では「恋」と「愛」と訳しわけるのがよいという意見もある。ちなみに心理学者／社会学者のジョン・アラン・リー（Lee 1973）は恋愛を情熱的・性的なエロス、友愛的なストルゲ、遊戯的なルダス、病的・狂乱的なマニア、奉仕的・自己犠牲的なアガペー、実用的・打算的なプラグマに分類していて、現在でも通俗的恋愛心理学書に類出する。

「酒中に真あり」作品内で、飲み会で恋愛論をうちあげて馬鹿さわぎして泥酔した登場人物男性たちが、馬車を飛ばして飲み会あけの朝の散歩としゃれこんだところで目撃したヴィルヘルム夫妻が朝の戸外でお茶をするシーンである。

彼が自分でお茶を飲む用意をしている間、彼女は続けた。「きのう私がこの話を始めようとする、あなたは話の腰を折られました。しかし私はもう一度このことを考えたんです。何度も私はこれについて考えました。そしていまとくに考えたんです。だれのせい、あなたはよくご存知のはずです。もしあなたが結婚なさらなかったら、世間で今よりずっと出世なさっていたでしょうに。」……ついに彼は、「ほんとうにそう思うのかい、おまえ？」と言った。「何のことですか」と彼女は答えた。「おまえ自身がすぐに忘れてしまったのだから、私はおまえの先程のばかげた言葉を許そう。というのも、おまえの話し方は愚かな女たちにそっくりだからだ……」。判事夫人は一瞬この切り返しに当惑したように見えたが、すぐに気を落ち着けて、こんどは女性的な雄弁で自分の考えを練り広げた。……彼女が話しつづけたので、彼は右手の指でテーブルをとんとんとたたき始め、メロデーを口ずさんだ。その歌の文句が一瞬間こえてきた……「男は森の中に出かけ

ていって、〔鞭にする〕白い棒を切り取った」……彼は言った、「おまえが十分には知らないことだろうが、デンマークの法律では夫が自分の妻を殴ることは許されているのだよ。ただ残念ながら、その法律には、どんな場合にそれが許されるかが示されていないのだ」。夫人は彼の脅しに微笑みかえして言葉をつづけた。「でも、私がこの話をすると、どうして私はあなたに全然真面目になっていただけないのかしら。……私のために真面目になって、誠実にお答えください」。「いや、ぼくに真面目にしてもおうとしても、そうはいかないよ。……ぼくは、おまえのことを笑うか、それを忘れさせるか、あるいはおまえを叩くか、あるいはおまえがそんな話をやめるか、あるいは別の方法でおまえを黙らせるかしくちやいけない。」……彼は立ちあがり、彼女の額に接吻して、彼女の腕を自分の腕に組んで……並木道に消えていった。(4: 124-125)

上の第三者視点のヴィルヘルム夫妻の描写は、丁重ではあるが、夫婦二人のあいだになかなか深刻な問題があることが読みとれる。なにより、ヴィルヘルムは妻の言葉をまともに聴こうとしていないばかりか、口を封じるために暴力による脅しさえ用いている。これが結婚関係においてエロスの・審美的にも妥当な関係を維持している夫妻だとは信じがたい。夫婦ヴィルヘルムは、この描写に続く論

¹⁴ ちなみに、1851年までデンマークでは、結婚という制度は、デンマーク国教会が独占して承認していた。つまるところ、キェルケゴールにとって、結婚は個人にとって非常に重大な利害関係を含む社会制度・法制度であるとともに、それ以上にはっきりとした宗教的制度、キリスト教的制度であった。国教会の承認・祝福を経ない「市民的結婚／民事婚」が認められたのは1851年になってからである。この改革をめぐる存在したはずのデンマーク国内およびヨーロッパ諸国の議論や、それをキェルケゴールがどう見ていたかは興味深いテーマだが私の能力では調査することができない。

考「ある妻帯者の反駁」で、『あれか／これか』の論考と同様に結婚生活の倫理的価値を長大な文章で説くわけだが、その実際の姿がこのようなディスコミュニケーションと暴力と支配の示唆であるのはあまりにも皮肉である。この描写があるために、それに続くこれまた長大なヴィルヘルムの結婚称賛論はまったく無効にされている。

上のヴィルヘルム夫妻の生活が快調でなさそうなのはいくつか理由があるからだろうが、妻が「神はキリストのかしら、キリストは男のかしら、男は女のかしら」「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように自分の夫に従いなさい」という伝統的・キリスト教的な命令に反していたかもしれないわけだが、かといって夫が妻の言うことをまじめに聞かないでよい、というものでもないだろう。

『あれか／これか』の二番煎じ、あるいは解説としての『諸段階』は、Aかヴィルヘルムか、という「あれか／これか」ではなく、「あれもだめ／これもだめ」だということをはっきりさせるものだと言えるだろう。もっとも、「あれか／これか」がAとヴィルヘルムの人生観の選択ではない、ということは『後書き』などを读んでいる後世の読者には自明ではあるが、創作の途上、あるいはケルケゴール本人にとっては、それほどはっきり宣言されたことではなかった。「結婚するがよい、そうすれば君は後悔するだろう、結婚しないがよい、そうしてもやはり君は後悔するだろう。結婚してもしなくても、君はどちらでも後悔するだろう」(1: 57)という『あれか／これか』の冒頭「ディアプサルマータ」で宣言された事柄ではある。

つまるところ、『あれか／これか』と『諸段階』

の姉妹作品は、一方では通俗的なロマンチックな恋愛の幻想を滑稽に打ち碎きながら、情熱と情欲の生活の不毛さをも指摘し、また一方では善良なる通俗的結婚倫理／性道徳が現実には陥ってしまう偽善性を暴きたてているのだ。それではケルケゴールの理想の愛の哲学はどのようなものか。

『愛の業』での恋愛と友情の否定、あるいはその道徳的・宗教的価値の否定

第1節で述べたように、(個人に関わる倫理と対比される意味での) 社会的な倫理、あるいは対人的な倫理に関するケルケゴール自身の見解は、おそらくケルケゴール自身が当初想定していた「最晩年」の作品である『愛の業』(1846)に現れているはずだ。

『愛の業』では、「汝隣人を愛せ」という新約聖書の核心的な命令がいったいどのようなものか、どのように理解するべきか、が膨大なページを費やして論じられている。そこでは、隣人愛と呼ばれるキリスト教的な愛が、詩人たち(文学者やキリスト教からみて「異教的」な哲学者たち)が称揚し、我々世俗の人間が求めるエロチックあるいはロマンティックな「愛」と対比されることになる。

『愛の業』は大部で大量の論点を含んでいるのでほんの一部しか扱うことができないが、ケルケゴールがロマンチックな恋愛に関して(キリスト教からして)最大の問題点と考えていたことがらは次の点だろう。すなわち、キリスト教の命じる隣人愛は、自己愛と対立するものであり、そして詩人や哲学者たちが「他者に対する愛」として称える恋愛や友愛は、実は自己愛の一種でしかない、というこ

とだ。

とにかくキリスト教というのは、愛の何たるかについて、愛するということについて、どんな詩人にもまして精通しているはずである。だからこそ、恐らく詩人たちの見落すことも、つまり、彼らの称える愛は隠された自己愛に他ならないこと、そして己れを愛する以上に他人を愛せよ、という、この愛の陶醉した表現は、まさしくこの点から説明がつくということも承知しているのである。恋愛はいまだ永遠なものではない。それは無限性のもつ美しい眩暈である。(10: 34)

詩人とキリスト教との論争点は極めて厳密にはこのように規定せられる。つまり、恋愛と友情は偏愛であり、偏愛の情熱である、と。(10: 82)

詩人や哲学者が称賛する愛 (Elskov : 恋、恋愛) は偏愛 (Forkjerlighed¹⁵) でしかない、というのは、つまり、恋愛や友情において、我々は単に自分の好みにあった特定の人あるいは人々を愛し、その同伴や交流を欲求ということである。そして上の『人生航路の諸段階』で見たように、我々は往々にしてなぜその相手を愛しているかわかっておらず、自分自身にとっても相手を愛する理由は謎である。もし仮にはっきりした理由があるとするれば、それは他の同じような特徴をもつ相手にも適用できるようなものでしかなく、それは愛の対象が特定のかけがえのない存在、代替

不可能な存在であるという信念に反する。

ロマンチックな恋愛や、危機的な場面での友情では、生死をかけた自己犠牲的になされることがあり、それは人々を感動させる。しかしキェルケゴールとキェルケゴールにとって、そんなものは自己愛にすぎない。しばしば愛する相手は「もうひとりの私」であると言われるが¹⁶、まさにそれが恋愛や友情が自己愛にすぎないことを暴露してしまっている。

情熱的な偏愛がある別の形式の自己愛であるということが、今や、逆に自己否定の愛は人の愛すべき隣人を愛するものであるということとあいまって証明されなければならない。自己愛というものは、それを自己愛たらしめるゆえんのこの唯一の「自己」に同じように極めて利己的に集中するが、恋愛の情熱的な偏愛は同じく極めて利己的にこのたった一人の恋人に集中し、友情の情熱的な偏愛もこの唯一の友人に集中するのである。

恋人や友人は、だから、実に注目すべき、また深い意味のある事柄だが、もう一つの自己・もう一人の私なのである――なぜなら、隣人とはもう一人の君、あるいは最も厳密には平等性の第三者だからである。それは別の自己・別の私なのである。だが、自己愛の本質はどこに存在するのであろうか？ それは私の中に、自己の中にある。だとすれば、別の私・別の自己を愛することの中にも自己愛はやはり潜んではいけないだろうか？ (10: 84)

¹⁵ 英語なら preference あるいは preferential love である。

¹⁶ たとえばプラトンの『饗宴』でのアリストパネスの演説にあらわれる発想である。

「私」「自己」が、(人間的な)恋愛や友情によって「もうひとりの私」「もうひとつの自己」に拡張されたところで、自己愛は自己愛にすぎず、それは自己中心的な人々の自己愛と変わるところがない、というのだ。

愛が偏愛である場合には、それは選択的であり、(アリストテレスが指摘しているように)相手をもつなんらかの長所や美点や(自分にとっての)有用性や快樂のために交際しているのだ。しかしそれは結局のところ、自分の利益や快樂や善のためである。相手がなにか恩恵をもたらしてくれる場合には多少の欠点や短所には目をつぶることができるわけだが、しかしそんなことはなにも誇ることができるものではない。利益がその補償にあるからだ。だからこそ、キリスト教的な隣人愛は優れたものではなく、劣った者、不完全なものへこそ向かう。この点で、ケルケゴールのキリスト教的な愛は、プラトンやアリストテレスの「異教」の哲学者たちの「優れたもの、美しいものへの愛」(エロース/ピリア)とは対照的である。そしてそれがキリスト教の愛の価値であるということになる。

ある人を彼の弱さ・欠陥・不完全さにもかかわらず愛しうるということはいまだ完全なものではなく、むしろ彼の弱さ・欠陥・不完全さにもかかわらず、それらゆえに彼を愛すべきものと考えうということが完全なものなのである。

ある奇妙な誤解のために、人は恐らく、隣人への愛は神への関係から切り離されるべきではないが、しかし恋愛や友情はむしろそうあるべきだというようについ思いってしまうのではなからうか……

多くの者はある奇妙な誤解によって、多分、隣人を——この可愛げのない対象を愛するのには神の助けが必要だが、逆に恋愛や友情に関しては自助こそ最善と考えているのではないだろうか。ああ、神の干渉などはここでは所詮迷惑至極、お邪魔虫でしかないかのように。しかしながら、いかなる愛、いかなる愛の表現も、世間的にも単に人間的にも、神への関係から引き離されてはならないのである。(10: 226、強調は江口)

結婚生活においても、キリスト教的には、お互いに対する愛ではなくまずは神に対する愛がなければならない。

愛は、たとえそれが傾向性の最高の幸福であり喜びであろうと、たとえそれが恋する者たちにとってはこの世の生の最高の善であろうと、やはり真の愛ではない。これはこの世には到底理解できないことなのだが、神はこのようにしてすべての愛の関係における第三者であるのみならず、もともと唯一の愛される対象なのであって、だから妻に愛された者たるのは夫ではなく神であり、夫によって神を愛するよう手を差しのべられるのが妻であり、またその逆でもあって、この関係は不変である。(10: 176)

キリスト教的な愛は、相手から愛しかえされるという報酬すら求めない。むしろたいいてい場合には憎まれることを覚悟し、意志を強らなければならないことすらある。

キリスト教的愛の内面性は、自発的に、己れの愛に対する報酬として恋人(対象)

から憎まれていようとするのである。
……それはいかなる報酬も持たない。愛
されていることという報酬すら持たない
のである。(10: 190)

このように、キェルケゴールにおける「愛」は本来的にはキリスト教的な隣人愛であって、恋愛や友愛は人間生活においては（うまくいけば）最上の人間的幸福ではあるだろうが、キリスト教的には価値をもたない、という形になっている。キェルケゴールの著作群があらかじめおおまかにプランニングされたものであるという想定をおこなうことができるならば、最初期から『愛の業』までに至るキェルケゴールの「愛」論はこうしたキリスト教理解にもとづいているはずだ。こうしたキェルケゴールのキリスト教的な「愛」の理解は非人間的あるいは反人間的であるとさえ思う人は少なくないだろう。しかしこれがおそらくキェルケゴールのキリスト教であり、キェルケゴールの愛に対する態度なのだ。

暫定的結論

キェルケゴールの愛・結婚・セックスに関する最大の特徴は、仮想人物として彼が作りだした審美家Aが楽しもうとしている享乐的恋愛だけでなく、ヴィルヘルムが称揚する夫婦愛ですら道徳的な優越性はない、ということにある。もちろん道徳的に非難されるものではないだろうし、恋愛はこの世の人生における幸福に重要であり、友情はそれなりには生きられないものではあるが、道徳的・宗教的に祝福されるものではない。宗教的に祝福されるのは、男女の二者間の恋愛や結婚で

はなく、あくまで神と信仰を媒介にした三者関係としての結婚なのだ。他の二者間の関係はすべて無価値であり、そんなものにかかっているのは異教的には「幸福」かもしれないが、少なくとも非キリスト教的である。「情欲の目で女を見たものは姦淫したのと同様である」といった言葉を文字通りに受けとめれば、『あれか／これか』や『諸段階』の登場人物たちの一部は罪人でさえある。そしてそういう聖書の文字通りの理解、原理主義的な理解がキェルケゴールのセックスの哲学だろう。

愛は対象の幸福と繁栄の維持と増進を願うものであり、キリスト教的な隣人愛においてもそれは明らかだ。哲学者たちが意見を違えるのは、対象の善（幸福）は、主体・行為者から見た相手にふさわしい幸福であるべきなのか、あるいは主体・行為者の観点ではなく、対象の観点からしての幸福や善であるべきなのか、という点である。キェルケゴールはおそらく、増進されるべきなのは、相手の観点からの幸福や善ではなく、神の視点からの幸福、善である、と答えるだろう（そして主体・行為者が正しいキリスト教理解と信仰をもっていればそれは主体の観点でもあるだろう）。キリスト教の理解では神は人間に自分を愛することを求め、それが浄福であるとされているのだから、キェルケゴール的な愛はまずは、自分が出あう人々、「見る人々」を覚醒させ正しい信仰を促すことである。まったくキリスト教的な愛であると感心せざるをえないが、そんな愛は、私には個人的には興味のもてない事柄である。

本論で紹介した『あれか／これか』『人生航路の諸段階』の解釈は不十分なものであり、より詳細な検討が必要である。キェルケゴール

ルの愛・セックス・結婚の哲学は現代的な問題意識に近く、非常に興味深いものを含んでいるので、今後国内でも研究が進むことを願っている。

【参考文献】

- Lee, John Alan (1973) *The Colours of Love: An Exploration of the Ways of Loving*, New Press.
- Soble, Alan (2008) *The Philosophy of Sex and Love: An Introduction*, Paragon House, 2nd edition
- 江口聡(2006)「性的モノ化と性の倫理学」、『現代社会研究』、第9号、京都女子大学。
- 大谷愛人(編)(1969)『キェルケゴールの言葉：絶望と愛と実存』、彌生書房。
- 戸谷洋志(2024)『恋愛の哲学』、晶文社。
- キェルケゴール(1994)『これか—あれか：第一卷』、太田早苗・大谷長訳、キェルケゴール全集第1巻、創言社。
- (1995)『これか—あれか：第二卷』、渡邊裕子・近藤英彦・大谷長訳、キェルケゴール全集第2巻、創言社。
- (1996)『人生航路の諸段階第1巻』、山本邦子・大谷長訳、キェルケゴール全集第4巻、創言社。
- (1997a)『人生行路の諸段階第2巻』、國井哲義・大谷長訳、キェルケゴール全集第5巻、創言社。
- (1997b)『愛の業』、尾崎和彦・佐藤幸治訳、キェルケゴール全集第10巻、創言社。
- ラジャ・ハルワニ(2024)『愛・セックス・結婚の哲学』、江口聡・岡本慎平監訳、名古屋大学出版局。